

論 説

アタチュルク ,そして軍...現代トルコ 非民主性 の系譜

鈴 木 雅 明

目 次

<序>

- (1) タブーのアタチュルク批判
- (2) アタチュルクは民主的指導者か
- (3) 紆余曲折のアタチュルク革命
- (4) トルコの軍事国家
- (5) アタチュルクと一体化した軍
- (6) アタチュルクなき軍の支配
- (7) 第二次世界大戦ー冷戦
- (8) 複数政党制の時代
- (9) 60年クーデター・・・軍秩序の開始

序

トルコは将来、欧州連合（EU）に加盟し、欧州国家として生きていこうとしている。だが、その政治支配システムは欧州基準の民主主義とは異なる。言論の自由、結社の自由などが制限され、少数民族クルド人は人権を抑圧され、イスラム政党は国是の世俗主義に反するとの理由で、常に圧迫を受ける。EUがトルコの加盟受け入れに躊躇する大きな理由のひとつは、こうした非民主性にある。その根源は、近代トルコ国家の生成過程と切り離すことができない。トルコの民主化は、近代トルコ存在そのものの否定につながる側面を持つ。なぜなら、トルコ建国の父アタチュルク、その思想の継承者で守護者を自任する軍の歴史的役割に批判的考察を加える必要があるからだ。現在、トルコで、こうした議論はタブーである。だが、このテーマを避けてトルコの将来像を語ることはできない。以下は、筆者が、読売新聞記者としてイスタ

ンプールに滞在した一九九七年から二年半の期間の取材体験をもとにした一考察である。

(1) タブーのアタチュルク批判

トルコ人は概して愛国者だが、法律によってもトルコ国民は国家を愛することが義務付けられている。1991年3月12日に改定される前のトルコ憲法の第141条(現在は無効)は、共産主義、アナーキズム、独裁思想のほか、反国民思想を刑罰の対象にしていた。反国民とは非常に漠然とした概念であるが、国家への忠誠を求めた条文である。

現在も愛国心の義務付けは刑法の条項で明記されている。刑法145条は、トルコ国旗を引き裂いたり焼いたりする罪を禁固一年から三年とし、この犯罪を国外で犯した場合は、さらに刑期を三分の一増刑するとしている。158条では、大統領侮辱を禁固三年以上とし、出版物で侮辱した場合は、三分の一から二分の一の増刑と定めている。次の159条では、国会、国家、軍、警察、その他の国家機関に加え、「テュルクルク」への侮辱を規定している。「テュルクルク」とは、トルコ的なものでも訳せようか。これも漠然とした概念である。同条の刑罰は禁固一年から六年である。

だが、なんといっても愛国心の中心にあるのは、トルコ共和国建国の父、ムスタファ・ケマル・アタチュルクである。

アタチュルクは、1881年、現在ギリシャのサロニカで生まれた。父はオスマン帝国の下級役人、母は敬虔なイスラム教徒だった。当時、サロニカは、多くのユダヤ人をはじめ様々な人種の人々が混住するコスモポリタンな町だった。その雰囲気は彼の成長に大きな影響を与えよう。母は、彼にイスラム聖職者になってほしいと願い、初等教育のため宗教学校に彼を入れた。だが、そこを飛び出して陸軍幼年学校に入った。こうして、将来、軍人になる道を自ら選んだ。

のちに国民をひっぱっていった激しいほどの自信家ぶりは少年時代からのものだ。その自信ゆえに、オスマン帝国末期の改革を目指して権力を握った青年トルコ党の指導者エンベルにも露骨な批判を加え、主流にはなりえなかった。だが、軍人としての技量にはめざましいものがあり、第一次世界大戦でドイツ側に立ったオスマン帝国に侵攻しようとした英国軍を1915年、ダルダネルス海峡入口のガリポリで食い止め、司令官としての力量は国際的にも高く評価された。アタチュルクはこの勝利で一躍、国民的英雄になった。

1918年、西欧列強は第一次大戦で敗北したオスマン帝国の分断に乗り出し、帝国は消滅する危機に直面した。ここで立ち上がったのがアタチュルクである。その思想の新しさは、オスマン帝国と断絶し、近代的ナショナリズムを基盤にしたことである。様々な政治、社会勢力を結集し、西欧列強を牽制したうえで、1921年には、小アジアを併合しようとするギリシャ軍をサカリヤの戦闘で破り、トルコ独立実現の布石とした。この戦争は、歴史的には、西欧帝国主義

に対する世界史上初の民族解放闘争ともなった。

アタチュルクの目指したものは、西欧をモデルとする近代国家の樹立であった。そのためにはオスマン帝国と言う巨大な過去との断絶をはからねばならなかった。具体的には、君主の持っていた政治的最高指導者であるスルタン，イスラム教の最高権威であるカリフの地位を廃止し，政教分離の世俗主義を基本とする共和国を樹立した。

この大事業の完成には，カリスマ的指導者アタチュルクの存在がつねにあった。この軍事的，政治的天才は，20世紀初頭の，まごうことなき英雄である。トルコ人にとって，その存在が偉大であるのは当然すぎる。

無論，アタチュルクの誹謗・中傷は罰せられる。1951年7月25日施行の「アタチュルクに対する犯罪に関する法律」によると，アタチュルクを誹謗・中傷した者は禁固一年から三年，銅像や記念碑などを破壊した者は禁固一年から五年となっている。トルコでは，役所，学校，会社事務所，レストラン，どこに行ってもアタチュルクの肖像画や写真が壁に掲げてある。1997年に，ある町役場の職員が事務所の整理をしていたときに，その肖像画を外して掃除の間だけ，トイレに置いた。悪気はまったくなかったが，その職員は逮捕され解雇された。アタチュルクはトルコでは神格化された存在である。彼を公然と批判できる雰囲気はトルコにはない。

ある高校の歴史教師は私に話した。教室でアタチュルクの歴史的貢献を教える際に，礼賛以外のこと，とくにマイナス面に触れることは，ほとんど不可能だという。それが発覚すれば，解雇だけなら運が良いとみなければならず，警察・治安当局に逮捕される恐れが十分あるというのだ。トルコの基本教育法は冒頭の第一条で，「トルコ教育制度の目的」として，ナショナリズム，祖国への愛などと共に，子供たちを「アタチュルクの改革に忠実な市民」に育てると謳っている。

トルコの歴史教育は，アタチュルクとその思想を尊敬する愛国者を育てる重要な手段なのだ，この教師は言った。近代トルコとアタチュルクに関する公的解釈は，現代トルコを理解する上で非常に示唆に富んでいる。それが集約されているのが歴史教科書である。1997年版の教育省が発行した高校用歴史教科書「トルコ共和国とケマル主義」を引用してみよう。

「アタチュルクは，偉大な指導者であり，民主主義を真に愛した人である。彼によると，『自由のない国には，死と破壊だけがある。自由は発展と救済の母である』。このような気高い意見の持ち主が，民主主義の理想を現実化するために闘った。これは，アタチュルクが全生涯にわたって実行してきたことである。彼の文章のすべての行に，彼のすべての演説に，つねに，民主主義への切望が表明されている」

トルコでアタチュルクを語るとき，アタチュルクが「偉大な指導者」であり，「民主主義を真に愛した人」であることは大前提である。それによって，アタチュルクの政治的行動は，すべて民主主義実現の手段だったとして正当化される。さきの高校教師の言葉は，これに疑問を呈

することが許されないことを意味する。

(2) アタチュルクは民主的指導者が

アタチュルクは本当に民主主義的な思考をする人物であったか否か。これは実に興味深い問いかけである。イギリスの外交官ジャーナリスト、パトリック・キンロスの有名な著作「アタチュルク」の指摘は、この点に関して、いくつかの示唆を与えている。

アタチュルクは1923年1月29日、実業家の娘ラティフェと結婚する。ラティフェはフランスで育ち、西欧的教養、知性を備え、当時のトルコ女性にしては強い自立心を持ち、気性も激しかった。むしろ、それがアタチュルクを引きつけた。だが、この結婚は短く、1925年8月5日には正式に離婚した。彼の生涯で一回だけの結婚である。

気性の激しいラティフェとの感情的行き違いが原因とされるが、キンロスは、アタチュルクの離婚のやり方に焦点を当てる。

「イスラム法では、夫は一方的に妻と縁を切ることが認められる。夫が言うべきことは、『家を出ろ』あるいは『おまえには二度と会いたくない』だけである。これが、事実上アタチュルクがやったことである」

双方の合意で離婚したと公式に発表されたが、実際には、一方的な離婚だったという。日本式には、三下り半である。

アタチュルクは、明治日本の鹿鳴館をトルコに再現したとも言える。近代化、つまり西欧化を社会に広げるために、軍将校やその妻たちに洋装でダンスをすることを奨励し、イスラム伝統の女性が髪を隠すスカーフを外させ、女性の解放を主張していた。こうした西欧型民主主義の推進者が示した横暴な「東洋的」離婚のやり方に、キンロスは一人の人物の中の矛盾をみる。

現実政治では、アタチュルクは明確に独裁者と呼ばれるべき行動をとった。

1925年2月13日、クルド人指導者シェイク・サイドが東部デルシム（現在のトゥンジェリ）で、共和国に対する大規模な反乱を起こした。1923年に発足したばかりの共和国に訪れた最大の危機である。23年10月29日の共和国宣言とともに初代大統領に就任したアタチュルクは、反乱に対応するため、25年3月、秩序維持法を国会で通過させた。この法は政府に実質的に絶対権力を与えるもので、当面は二年間有効とし、その後は必要に応じて延長が可能とされた。反乱は拡大したが、二か月後にはシェイク・サイドが逮捕され、収拾した。サイドは秩序維持法による特別法廷で裁かれ、ディヤルバクルで公開処刑された。だが、同法は延長されて結局、1929年3月4日まで続いた。

秩序維持法によって政府は、反革命、反乱を助長するとみなされる組織、出版など、あらゆるものを禁止、あるいは抑圧する権限を持った。その中核になったのが特別法廷である。この

法廷は南東部など軍事作戦地域を中心に設けられたが、首都アンカラにも設置された。ここでは、国会の承認を必要としない即決処刑も行われた。トルコ専門家として知られる米国マサチューセッツ大学教授フェローズ・アハマドの著書「近代トルコの生成過程」(The Making of Modern Turkey)によると、最初の二年間で五百人以上が死刑判決を受けた。

共和国宣言の二か月前、1923年8月9日、アタチュルクは自らの権力基盤となる政党として人民党を創設した。この党は共和国発足とともに名称を共和人民党とし、一党支配を保っていたが、シェイク・サイードの反乱の三か月前、1924年11月17日に、新たな政党として進歩共和党(当初は進歩党)が設立され、トルコは複数政党制に踏み込んでいた。

新政党を主導したのは、独立戦争をアタチュルクとともに闘ってきたフセイン・ラウフ、カズム・カラベキル、アリ・ファトラ旧友たちであった。独立達成後の権力はアタチュルクに集中し、彼らが期待した果実は手に入らなかった。こうした不満に加え、アタチュルクが進める極端な世俗化政策に代表される急進的革新路線にも異議をはさんでいた。新党の結成は、政敵の誕生であった。進歩共和党は、秩序維持法に関しても、憲法違反、自由の破壊、権利侵害と非難した。

だが、秩序維持法の施行は政治的批判を容認する雰囲気喪失させていった。多くの新聞も廃刊に追い込まれ、政府批判勢力は沈黙を強いられた。こうした中で、1925年6月、進歩共和党も解党させられた。最初の複数政党制は、わずか七か月で終わり、一党独裁制に戻った。

このころのトルコは、恐怖が政治を支配していた。そういう政治状況下では、反動で過激な行動が生まれる。翌26年6月にはエーゲ海に面した都市スミルナ(現在のイズミール)に旅行したアタチュルクに対する暗殺未遂事件が発生した。犯人グループは逮捕されたが、同時に事件の首謀者として進歩共和党に疑惑の目が向けられた。そしてアリ・ファトラ党指導者は、最後には放免されたが、逮捕され特別法廷にまで送られた。政治的疑心暗鬼の時代を象徴する出来事であった。

(3) 紆余曲折のアタチュルク革命

それから四年後、1930年、アタチュルクは自ら複数政党制の復活に乗り出した。当時、政治的抑圧の継続に加え、1929年10月のニューヨーク株式市場大暴落に始まる世界恐慌でトルコ経済も大きな打撃を受け、国民の政府への不満はアタチュルクの威信を揺るがす恐れが出るまでに高まっていた。キンロスによると、近代化に戸惑っていた伝統的トルコ人の西欧化への嫌悪感、食料不足が到来するのではないかという恐怖感で、ますます強まり、こうした事態は無信心の罰とみられるようになった。断食月のラマダンには再び多くの人がモスクに戻ってきた。

このような光景は、オスマン帝国の伝統からの断絶によって近代化を推進してきたアタチュ

ルクには、危険な反動に見えた。また、政府の役人の給料は低く、汚職の誘いに曝され、各地に山賊団が出没し、クルド人も再び不穏な動きをみせていた。アタチュルクが複数政党制復活に乗り出した狙いは、政府およびアタチュルクに向けられる批判の分散にあった。

だが、野党となるべき新政党は、アタチュルクの路線を全面的に支持する穏健なものでなければならなかった。こうしてアタチュルクが新党指導者に選んだのは、アリ・フェティだった。フェティは、1925年3月の秩序維持法施行直前から首相の座にあるイスメト・イノニユ（のちの第二代大統領）の前任者で、首相辞任以来五年間、駐フランス大使を勤めていた。非常にリベラルな思考をする穏健な人物とされている。

1930年7月に帰国したフェティを説得したとき、アタチュルクは「私はトルコを独裁制に似せたくはないし、国民に全体主義体制の遺産を残したくもない」と語ったという。フェティはこの説得を受け、同年8月、自由党を設立した。

ところが、名目だけの野党として発足した自由党は、アタチュルクもフェティも予想しなかった反響を呼んだ。このときの情景は、キンロス著「アタチュルク」に詳しい。

9月、フェティは自由党の新しい支部開設式のためにイズミールを訪問した。この式典は、できる限り控えめに行うよう準備された。警察は、(野党に対する反感から)フェティに対する攻撃を警戒していた。だが事態はまったく逆の展開となった。フェティは英雄として大群衆に歓迎され、この騒ぎは、あからさまな反政府デモとなった。事態がおかしくなったと感じた地元当局は、秩序維持のため、フェティが演説を予定していた党集会の延期を要請した。

一方、共和人民党は急きょ、自分の党の集会開催に乗り出したが、十分な動員ができなかったうえ、共和人民党の演説者たちは、フェティの登場を求める群衆の罵声に沈黙させられる始末だった。群衆は町の通りにあふれ、フェティの宿泊しているホテル、共和人民党本部の前をデモ行進し、ガラス窓を破壊する騒ぎにまで発展した。このため警察が出動して発砲し、軍も秩序回復のため召集された。

こうした中、アタチュルクの電報での指示で、フェティは演説を実行した。そこで示された自由党の党プログラムは、人民の精神的指導者としてアタチュルクを称賛し、決して反政府的ではなかったが、大群衆は、騒然とした興奮が渦巻く中で演説に聞き入った。フェティはイズミールに続いて、マニサ、バルクシェヒルを訪問し、ここでも熱烈な歓迎を受けた。

この突然の興奮騒ぎは、明らかに、強引なアタチュルク路線のもとで鬱積していた不満の爆発であった。とくに、共和国発足後の急速な西酸化によって、伝統的生活様式が破壊されるのではないかという一般大衆の危機感が強かった。フェティの演説旅行中に、それを象徴する光景が如実に見られた。アタチュルクは1925年に、トルコ人の男が外出のときに欠かせない伝統的なフェズ帽（トルコ帽）を禁止した。これは明治日本の断髪令に匹敵する。フェズ帽に替わって西欧式のソフト帽が導入された。アタチュルクが断行した伝統との訣別の有名な例である。

フェティは、ある会場で、意図せずに、あいさつで自分の帽子を持ち上げた。聴衆はこれをフェティの西欧化批判と勘違いし歓喜で応じ、自分たちも帽子を取って地面に叩きつけた。また別の場所では、歓迎の横断幕が「無神論の共和国に対抗する信仰の守護者」と、フェティをうたいあげた。

当然、共和人民党は、自由党に強い警戒心と疑惑を抱くようになった。この年11月の国会は、両党が激しく衝突する場となり、自由党は最早、穏健で従順な野党には成りえないことが明白になった。このため、フェティは自ら自由党の解散を決意し、アタチュルクに伝えた。新たな複数政党制の試みは、わずか三か月で潰れた。

自由党が解散した11月17日から、わずか一か月後の12月23日、イズミール近郊のメネメンで忌まわしい事件が発生した。自由党の集会で見られた雰囲気、過激な血生臭さが加えられたものだった。

トルコのイスラム教の主流である神秘主義教団ナクシュバンディに属するデルビシュ（修道者）で、メフメトという男が、自分は救世主だと名乗り、一団の男たちを率いて、イスラム法とカリフ制度の復活を要求しながら町を歩き始めた。これを制止するため、軍警備隊の予備将校一人が現場へ派遣された。だが、この将校は逆に、メフメトらに取り押さえられ、首をはねられた。一団は、その首を旗竿の先に突き刺し、町を練り歩いた。

この残酷な事件は単発的なものだったが、共和国指導者たちには激しい衝撃となった。建国以来の改革が依然として地に着いていない現実を最も劇的な形で知ったからだ。

この六年余りの時代をトルコ共和国の公的史観がどのように表記しているのだろうか。高校歴史教科書「トルコ共和国史とケマル主義」に戻ってみよう。

「民主主義を一朝一夕に樹立することはできない。いくつかの条件が満たされなければ、民主的体制は現実化しない。敵に侵略され、独立が存在しておらず、国が分断されているときに、民主主義が意味を持つだろうか。それゆえに、アタチュルクは、まず独立のために闘うことを選んだ」

「民主主義は、国民主権に基づく、独立した近代的社会でのみ可能である。民主主義を真に愛したアタチュルクは、この点をわかっていた。彼は、ときとして、トルコの状況が民主主義に適しているかどうかを見るための実験を行った。アタチュルクは、トルコを複数政党制に移行させたかったのである。だが、いずれの実験でも、真の民主主義実施には依然として長い道程があることが証明された。なぜなら、この期間に設立された野党はいずれも、過去の体制に戻ろうとしたからである。野党は、アタチュルク革命、近代化プロセス、そして国民主権すら破壊しえたのである。それゆえに、アタチュルクは民主主義の実験を断念し、後退して、より適切な時機を待たねばならなかった」

教科書は、シェイク・サイードの反乱、アタチュルク暗殺未遂事件にも触れ、首謀者が逮捕

され刑を受けたとは記しているが、彼らが死刑に処せられたとは書いていない。さらに、この1925年から30年の時代について、「偉大な革命が実践され、平和な時期になった」としている。

この時期に、現在のトルコ共和国の基礎となる様々な革命的政策が導入されたのは事実である。1924年3月にカリフ制が廃止され、宗教学校が閉鎖されたのに続く時期である。

25年、フェズ帽の廃止

26年、イスラム教団非合法化

西欧市民法の導入

28年、トルコ語表記をアラビア文字からラテン文字に

こうした新政策は、いずれもオスマン帝国の伝統の中に生きていた人々を、西欧型近代社会に再編成する変革の根幹を成すものである。だが、社会の大変革に着手したわけであるから、世の中が平穏であったはずがない。従来 of 伝統と切り離された、まったく新しい社会構造を短期間に創出するには、絶対的な、強権、独裁的権力が不可欠である。

アタチュルクはこうした権力を持ったからこそ革命的政策を実行することができた。その権力をアタチュルクが持っていたことは、高校教科書の記述でも理解することができる。「すべての権力を国民に与える」、「民主主義の実験を行う」といった記述の主語はすべてアタチュルクである。

アタチュルクは、公的史観あるいは現代のトルコで多くの人々が信じている考え方を解釈して表現するなら、「民主的独裁者」なのである。字義の上でのこうした矛盾が受け入れられるところに、トルコの「民主主義」の特異性がある。だが、アタチュルクを独裁者と呼ぶことは、トルコではタブーである。公言すれば、おそらく、「アタチュルクに対する犯罪に関する法律」に基づき、刑事罰を受けるだろう。こうした法律を生む背景には、民主主義はアタチュルクが与えてくれたものなのだ、アタチュルクが共和国を作ったから民主主義が実現したのだ、という信仰にも似た観念がある。

「民主主義」という同じ言葉で呼ぶが、西欧で生まれた古典的民主主義の概念とは、決して相入るものではない。近代的自我に目覚めた個人が理性的議論を重ねて、自らが所属する社会を、自らの手で運営していくために完成したシステムを民主主義と定義するなら、トルコ人の観念にある「民主主義」は、民主主義ではない。アタチュルクという個人が、まるで天が授けるかのようにトルコ人民に与えてくれたものだからである。トルコ人のこうした「民主主義」観念は現在も、日常的に見ることができる。

（４）トルコの軍事国家

今，アタチュルクに替わる存在として，軍がある。トルコ軍は1961年，71年，80年に，いずれも「共和国護持」のためクーデターを起こした。1997年2月には，国是の世俗主義が危機に直面しているとして，イスラム政党・繁栄党の政権に圧力をかけ始め，同年6月，同党党首のネジメティン・エルバカン首相を辞任に追い込んだ。軍は政府の上に立つ絶対的権力を保持している。

軍に対して多くのトルコ人が持つ信頼感は，アタチュルクに対するものと共通点がある。「民主主義を最後に守ってくれるのは軍だ」という観念に，それを見ることができる。95年から97年にかけて繁栄党が政治的影響力を増大するにつれ，イスタンブールなど大都市に住む金持ち層，とくに普段は宗教とまったく関わりを持たず，西欧化した生活を楽しんでいた人々のあいだには，「イスラムの再興は民主主義を破壊する」という不安とともに，軍事クーデター待望論が広がった。

「軍事介入による民主主義擁護」という思考様式は，「民主的独裁者」と同様，西欧型民主主義の概念にはなじめないが，トルコでは，かなり一般的な考え方である。テレビの討論会などに出演して有名なイスタンブール大学政治学教授タクタムシュ・アテシュは，タブーになっているアタチュルク批判に挑戦する非常にリベラルな人物である。それ故に，頑迷なアタチュルク信奉者からテロの脅迫を受けたことすらある。

私はアテシュと数時間にわたり，トルコの民主主義について討議したが，最後まで理解できなかったのは，リベラルで西欧型民主主義の概念も十分理解している政治学者が，「トルコの民主主義を最終的に守ってくれるのは軍だ」と主張し続けたことだった。「政党政治で成り立つ政府を軍が倒すのが民主的なのか」，「文民支配が民主主義の基本ではないか」，「軍が民主的であり続ける保障はあるのか」といった私の疑問への答えは，「軍は民主主義と共和国の守護者だからだ」というだけだった。

「権威が民主主義を与えてくれ，守ってくれる」というメンタリティの継続自体が，西欧的民主国家を建設するために開始したアタチュルク革命の矛盾である。軍が国家を支配するというところに，トルコの多くの人々は違和感を覚えない。むしろ，軍が国家の基礎という感覚が行き渡っている。軍の政治介入が正当化される政治土壌が，トルコには深く堆積されている。

中央アジアからの民族移動で現在のアナトリア地方に定着したトルコ民族は，15世紀にオスマン帝国の基礎を確立した。帝国の揺籃期，軍隊そのものが国家であり，その後，アジア，ヨーロッパ，アフリカの三大陸に跨る世界帝国へと拡大していくが，その基礎になったのも，ヨーロッパ世界を恐怖に陥れた精強な軍勢力であった。やがて，ヨーロッパの再興とともに，帝

国が斜陽に差しかかったとき、国力回復のために、まず手掛けられたのは、軍の近代化だった。軍は帝国の歴史で常に中心に位置し、帝国末期に、改革を目指して立ち上がり、政治の実権を握ったのも、「青年トルコ」と呼ばれる若手軍人集団だった。そして、帝国が第一次世界大戦を経て消滅状態になったとき、新生トルコ共和国樹立へ向かって強烈な指導力を発揮したアタチュルクも軍人である。

オスマン帝国は、その国力を維持するために、またアタチュルクは、帝国の伝統を捨て新トルコ共和国を創設するために、西欧の価値や技術を導入する改革を行った。とくに、明治維新と比べられるアタチュルク革命は、あらゆる過去の否定に挑戦し、大きな変革を実現した。だが、米国ワシントン大学客員教授のトルコ人社会学者レシャト・カサバは、双方の改革の共通性を指摘する（論文集「トルコの近代性と国民アイデンティティ再考」）。その共通性とは、常に、上からの改革であったという点だ。

カサバによれば、帝国、共和国双方の改革者が、その着想を直接的に得たのは、フランス革命だった。ここで言うフランス革命とは、1789年の大革命というより、1793、94年に全権を掌握した急進派ジャコバン党の、いわゆる恐怖政治の時期である。

ジャコバン党は過去の王制の伝統を断ち切るため、暦の再編、王制と関わる街の通りの名前の変更、「革命モデル」と呼ばれる服装の導入などを強権的に進めた。オスマン帝国、青年トルコ、アタチュルク以降の時代、いずれの指導者も、ジャコバン党同様に変革のために、外観をまず変えることに莫大なエネルギーを費やした。オスマン帝国は1829年にターバンを禁止し、フェズ帽のほか、フロックコート、ズボン、皮靴などを導入した。それから百年後の1925年、アタチュルクは、有名な帽子法で、フェズ帽を保守主義の象徴として禁止した。

カサバが言及している外観の強制的変更は、まさに上からの改革を象徴している。こうした改革の中心には、常に軍があり、現在に至る政治文化に多大な影響を与えた。

傾きかけたオスマン帝国は、中央権力を再強化する唯一の道として、軍の近代化に乗り出し、近代化とともに取り入れられた西欧文明は、軍を通じて帝国内に浸透していった。この過程で、帝国の権威を高めるための軍が、近代化を推進する母体となり、帝国を支える基礎となった社会を改編する中心機関へと変貌していった。

(5) アタチュルクと一体化した軍

軍にとっての最も画期的な転換点は、アタチュルクが指導した独立戦争だった。だが、戦争で決定的役割を果たしたものの、共和国発足当時の軍は政治的には、足並みが決して整ってはいなかった。アタチュルクの急進的な改革に批判的な将軍が駆逐されたのちに、初めて、軍は、国家及び、アタチュルクが創設した共和人民党と一体となっていった。

軍と政治への関わり方の歴史分析で知られるトルコの政治ジャーナリスト，セルダル・シェンは，その著書『軍と近代主義』の中で，現代トルコ政治の原形が誕生した当時を詳細している。以下は，それに基づいている。

自らが軍の出身であるアタチュルクは，軍を利用して反対勢力を一掃した。アタチュルクによる権力掌握に貢献した軍は，その体制と一体化し，新秩序を確立していく上で，最も有効な手足となったのである。革命を隅々まで行き渡らせる過程で，軍は明確にアタチュルクの側に立った。当時，国家の文民機関は，依然として，機能が不十分かつ未成熟であり，その当然の帰結として，国家機関として，最も組織化された軍の広範な役割が認められた。それに加え，軍自体にも，新たに，共和国軍人たる者のイメージが作り出された。十分な教養と信念を持ち，国家の中で重要な地位を占める自信を持つ者が将校である，という軍人像である。このイメージ作りは，実際の軍人教育以上に，彼らに自信を付けさせる上で，重要な役割を果たした。

だが，アタチュルク支配体制は，依然として，軍内部から批判が生まれる素地はあるとみて，外部の反体制勢力からの接触を拒絶するような，軍の体質醸成に乗り出した。アタチュルク思想が絶対であるとするイデオロギーの注入である。それによって，アタチュルク以外の政治思想を拒否する軍の政治体質が作り上げられた。

こうして，軍は，国家と人民の関係を律する最も重要な手段となり，新体制下の新たな国民を創出するイデオロギー闘争面で，大きな役割を演ずることになった。国家としての未熟さが，軍の政治的，社会的役割の重要性を決定的にしたと言える。アタチュルク思想を一般国民に普及させる上で，軍が教育面で果たした役割は，とくに大きかった。

独立戦争当時から，新国家思想を広める目的で活動していた「人民の炉辺」と称する草の根との接触の場が，各地に存在していた。1932年2月，共和人民党は，これを発展解消し，全国に「人民の家」を設けた。オスマン帝国の伝統と完全に離別した近代国家の概念を，成人教育を通じて末端まで行き渡らせるための学校であり，文化大革命を実現しようとする運動体である。この運動は，近代トルコの精神的基盤の確立に大いに貢献した。共和人民党と一体化した軍は，この運動に積極的に参加した。

人民の家の主眼は，国民をアタチュルク思想で教育し，支配層と国民の間に，思想的一体感を創出する点にあった。大衆に新国家の一員であるとする自覚を持たせるとともに，反対勢力につけいる隙を与えない社会的支配網を広げる大規模な政治戦略でもあった。伝統的イスラム社会では，人々が日常的に集合する場はモスクであり，世論形成はモスクを主体に行われる。人民の家は，モスクの社会的，政治的役割を剥奪するものでもあった。

人民の家は，いわば，日本の公民館のような体裁だった。政治教育のほかに，スポーツ，映画，音楽などの文化活動を行う文化センターでもあった。成人向けの読み書きや工芸品などを作るための職能教育，健康指導，公衆衛生教育なども行われ，あらゆる年齢層が日々の生活で

人民の家と関わることになった。

セルダル・シェンは、この運動に参加した軍人たちのメンタリティを知る資料として、1939年に出版された『軍の社会学論文集』(S・G・エルケル著)をあげている。その本の表紙には、軍参謀本部による「軍メンバーに有益」との推薦が記されており、内容は軍が公認する価値観そのものである。

シェンによると、軍は国民の上に立つ指導者だという強烈なエリート意識を持っていた。論文集は次のように述べている。

「我々の軍は常に、長い行進をする国民の先頭を歩く主導的組織である。我々の軍は、世界の発展とともに進歩を続けるだろう」

「国家防衛の必要性によって強められた国民意識とその思想の結集が軍である。軍に凝縮した統一性こそが、ばらばらの個人をつなぎ、まとめる上げることができる」

ここでは、軍は国家をより良き未来へ導く先導者であり、トルコ社会の最良の組織とみなされている。この自己イメージによって、軍は、より高度な社会的役割を担い、その活動は妨げられるべきではない、という行動原理が導き出された。また、上から下への指揮命令系統で動く軍は、一般国民とも同じメンタリティで接触し、人民の家を通じ、権威主義的政治構造を末端まで浸透させた。

また、軍人的思考は、軍を家族に似せている。家族の指導者は父親であり、軍では司令官が父親である。家父長制を伝統とするトルコ社会の家族では、父親が絶対的権力者、保護者であり、家族構成員は西欧的概念での独立した個人ではありえない。軍は、国民を、軍を通じて国家と結び付けようとしたが、その国家もまた家族であり、軍は国民を国家という最大の家族の従順かつ忠実なメンバーにしようとしたのである。

軍を主導者とし、国民を将来の軍人とみなすことは、規律と権威を社会の中心価値に置くことである。アタチュルク革命の目指したものは、国家と社会を西欧をモデルに近代化することであった。だが、「国民家族」の思考は、西欧的概念である「個人」の育成ではなかった。オスマン帝国から新生国家への移行という大事業を混乱なく進めるには、個人の自由を芽生えさせない権威主義的支配体制が欠かせなかったのだ。当時国民に移植された国家観は、現代のトルコでも隅々まで浸透している。現在のトルコ政治を論じるとき、この国家観を避けて通ることはできない。

軍の権威主義的手法が確立され、その正当性が深く浸透することによって、誰が支配者かは重要でなくなり、軍が主導して形成したシステムそのものが絶対的存在になっていったと、シェンは指摘する。共和人民党の一党支配、その後の複数政党制開始期、クーデターによる政権打倒後の新体制など、アタチュルク以来の共和国政権は様々な顔を持ったが、アタチュルク思想という同じイデオロギーが維持されてきたのは、システムが、いわば神性を持ったからであ

る。

セルダル・シェンの、この最後の指摘は非常に興味深い。共和国発足以来、建国の指導者アタチュルクを除けば、トルコには独裁者が出現していない。軍の直接的政治介入は、明らかにクーデターと呼べる行動だけでも史上三回が記録されている。だが軍が政権の座に長く留まったことはない。第二次世界大戦後に生まれたアジアやアフリカの多くの新生諸国では、独立ないしは解放闘争で活躍したゲリラ組織が軍の中核となり、大きな政治的発言力を持った。そして、政治混乱をきっかけにして、その勢力の中から、様々な軍事的、政治的独裁者が誕生した。トルコでは、軍は政権を打倒しても、政治が正常化したとみると後ろへ引き下がる。まさに、システム自体が価値を持ち、神格化され、そこに乱れが生じ是正が必要になったときだけ、軍はその守護者として振る舞ってきた。

（ 6 ）アタチュルクなき軍の支配

軍は共和国初期のメンタリティを今も保持しているが、無論、現代に至る時代の変化の中で、軍自体も変貌した。アタチュルクの死、第二次世界大戦、冷戦時代の開始、トルコの西側陣営参加、共和人民党一党支配体制の終焉と本格的複数政党制の開始、60、70年代に世界の潮流となったスチューデント・パワー、隣国イランのイスラム革命など、1930年代から現在の間起きた内外の大きな出来事は、軍にも大きな影響を与え、むしろ、それによってトルコ国家・社会に君臨する現在の立場が確立された。

1930年代の「人民の家」時代から、1980年9月12日の軍事クーデターの時代に、一気に飛んでみよう。共和人民党と一体となっていた軍の変貌ぶりを如実に見ることができる。もはや、軍は、共和人民党と一心同体どころか、支配体制に危害を加える可能性がある政党として、猜疑の対象にしている。クーデターで全権を掌握した軍は、共和人民党を含む全政党を解散し、党首を逮捕した。軍は既に、政党や政府の上に超越し、国家意思そのものに成っていたのである。

当時、陸軍士官学校を卒業したばかりの若い将校だった人物の体験を紹介しよう。現在自営業者のN氏は、クーデターから一か月ほどたった10月のある晴れた日のことを忘れられない。その日は非番だった。午後、イスタンブールの駐屯地の芝生の広場に、仲間と座って談笑していた。そこへ憲兵が車でやって来て、N氏を問答無用で逮捕した。まったく予想していない事態だった。以来、11か月にわたって、彼は外界との接触を断たれた。

逮捕されると目隠しをされ、連行されたところは、MITと通称される「国家情報機関」だった。この組織の入った建物は、ボスポラス海峡を見下ろす景色の良い丘の上に位置するが、現在でも付近一帯は厳重に警備され、非常に近付きがたい場所である。

N氏への訊問は、彼の政治的傾向に集中した。N氏は、まったく逮捕理由の見当がつかず、「アタチュルクを尊敬し、その思想を信奉している」と答えた。彼の正直な心情だった。そして常日頃から仲間に公言していた通りに、「共和人民党を支持していた」と答えた。あとでN氏も気付いたが、彼の拘留が長引いたのは、まさに「アタチュルクが創設した共和人民党」の支持者だったからだ。

70年代のトルコは左右の勢力が激しく対立し、テロの嵐が吹き荒れた。軍は、政党、政府が事態に対応できなくなり、国家体制が危機に直面したとして、80年クーデターを起こした。この騒然たる時代に入ろうとする1972年5月、ピュレント・エジェビトが共和人民党の新党首に選出された。当時、同党は依然として、軍に最も近い立場の政党だったが、エジェビトは、党及び政治の民主化を主張し、軍の政治介入に反対していた。エジェビトの選出は、党と軍との伝統的関係の断絶を意味し、共和人民党は、そのころのトルコの政治概念では穏健派とはいえ、左翼陣営の政党と目されるようになった。

左右の激しい対立を前にして、軍は急進左翼分子による軍内部への浸透に神経を尖らせていた。そして共和人民党にも警戒の目を向けていた。

N氏は、この網に引っかかったのだ。共和人民党と軍の関係は、以前のものではなかったが、思想的には近く、N氏は軍人として、共和人民党支持者であることを明言するのに躊躇はなかった。だが、その明言によって、左翼の軍内部への浸透を警戒するMITは、N氏に左翼のレッテルを張り、急進的地下組織との関係を厳しく追及した。身に覚えのないN氏は否定するしか術はなかったが、訊問は繰り返し続いた。直接的な拷問はなかったが、留置所には、拷問に苦しみ、泣き叫ぶ声が聞こえた。後に、これは本物の拷問ではなく、N氏ら拘留者に精神的圧迫を加えるテープの音声だとわかった。拘留中、激しい緊張を強いられた。やっと容疑が晴れたとき、軍への復職も認められたが、彼は、この経験で軍に嫌気がさし、大学に入り直して民間人として再出発した。

N氏の体験は、80年クーデターの暗部をかいま見せている。1997年9月12日付けの新聞「ラディカル」はクーデター記念特集で、80年9月から三年間の出来事として、次のような数字をあげている。

- * 拘留者総数 65万人（うち23万人が裁判へ）
- * 死刑求刑 7千人（うち517人に死刑判決、49人が処刑される）
- * 非法法組織メンバーとして裁判を受けた者 9万8千404人
- * 要注意人物として記録された者 168万3千人（うち38万8千人にパスポート取得禁止措置）
- * 外国への亡命者 3万人（うち1万4千人がトルコ国籍を失う）
- * 不審死 300人（うち171人が拷問死、いまだに行方不明の者800人）
- * 刑務所のハンストによる死者 14人

- * 閉鎖された団体 2万3千667組織
- * 解雇者数 教師3千854人，大学研究者120人，裁判官47人
- * 左遷された公務員 7千233人
- * 解雇された公務員 9千400人
- * 発禁映画 937本

ラディカル紙が掲載したページの数字は，国家の唯一の「守護者」となった軍が，その目的を遂行するための権力を行使するとどうなるかを示すものである。70年代の混乱の中で，国民の間には，軍に政治介入を求める期待感もあった。そして，クーデターによって，日常的に起きていたテロ騒ぎはなくなり，平穏な市民生活が戻ってきた。だが，その後の大規模な政治弾圧は，時代を暗い雰囲気させた。

（ 7 ）第二次世界大戦－冷戦

軍が，絶対的支配者として，その権力を直接的に行使するようになるまでの過程を，時代を溯って辿ってみよう。

1939年に第二次世界大戦が勃発したころ，トルコ人には，第一次大戦の生々しい記憶が依然として強く残っていた。オスマン帝国は第一次大戦での敗北で崩壊し，地上から消滅した。その強烈すぎる記憶ゆえに，トルコは，第二次大戦では困難ではあるが中立の道を選択した。だが大戦での戦略的要衝に位置するトルコは，連合国側，ドイツそしてソ連からの強い圧力に曝され続けた。

連合国側が優位に立ち始めた1942年の12月からは，連合国陣営への参加を求めて英国が積極的にトルコへの働きかけを開始した。43年には英国首相チャーチルがトルコを訪問し，大統領イスメット・イノニユと会談した。国際的孤立感を強めていたトルコは，こうして連合国側へ傾斜していったが，依然として，ドイツの報復攻撃を恐れ，参戦には躊躇していた。しかし，ドイツを包囲するバルカン戦線を築こうとする連合国側は，トルコの参戦を強力にせまり，ついに1945年2月23日，トルコは，ドイツと日本に宣戦布告をした。大戦後に設立される国際連合の原加盟国にトルコを加える条件として，3月1日までの参戦という期限を，連合国側が突きつけたためだった。トルコは，かろうじて，期限に間に合い，これをきっかけに，戦後すぐに始まった冷戦体制で，西側陣営へ加わった。

1947年3月12日，米国は，トルーマン・ドクトリンを発表し，冷戦時代が始まった。ソ連を封じ込めようとする米国新戦略にとって，ソ連と国境を接するトルコの重要性は，一気に高まった。トルーマン・ドクトリンに基づき，米国はトルコへの軍事，経済援助を決定し，トルコ

との軍事援助協力条約を締結し、同年9月1日、トルコ政府はこれを批准した。米国は、同年6月には欧州の戦後経済復興を援助するマーシャル・プランを発表し、翌48年4月、その実行機関として発足した欧州経済協力機構(OEEC)、のちの経済協力開発機構(OECD)にトルコを加えた。

1950年6月、冷戦が直接的軍事衝突となった朝鮮戦争が始まると、トルコは米国の軍事的、経済的支援に答え、国連軍の一員としての派兵を決定した。ソ連の脅威を国境を接して直接的に感じていたトルコは、前年4月に発足した北大西洋条約機構(NATO)への加盟を熱望していた。トルコ軍の朝鮮半島での活躍によって、1952年2月18日、その加盟が実現した。

国内にこもっていたトルコ軍は、第二次大戦から、朝鮮戦争、NATO加盟に至る間、初めて、外部世界との直接的接触を経験した。旧態然とした装備しか知らなかったトルコ軍の将校、兵士には、先進的軍隊、とくに米軍の近代性、豊かさは、大きな衝撃だった。

現在はイスタンブールで、悠々自適の引退生活に入っているO氏は、徴兵で朝鮮半島に派遣された一人である。O氏が、自身の衝撃ぶりを語ってくれた。

当時の貧しい経済状況を反映して、トルコ兵の服装は、清潔にはしていたが、品質が粗悪で、つぎだらけだった。だが、米軍が支給してくれた兵服は、トルコでは見たこともないほど品質が良かった。最初の驚きは、長靴がナイロンの袋に入れられて、配られたことだった。当時、ナイロンは、トルコでは、まだ珍しく高価だった。朝鮮へ向かう輸送船の中で、トルコ兵たちは、ナイロン袋の奪い合いを演じた。

トルコ軍の食事は、通常、クルファスルイェと呼ばれる豆のトマト煮と、油で炒めてから炊くピラフと通称されるご飯と相場が決まっていた。日本で言えば、味噌汁とご飯に当たる最も基本的な食事である。だが米軍には、あらゆる種類の食品があった。食文化の違いで、口に合わないものもあったが、O氏は、生まれて初めて、パイナップルを食べた。彼によると、当時のトルコ兵の識字率は50%程度だった。米軍兵士の知的レベルの高さにも驚かされたという。

トルコ軍は、アタチュルク思想の体現者として誇りを持ち、国民から最も信頼され、尊敬される国家機関とされながら、他国の軍と比較した際のみじめさは覆うべくもなかった。経済政策のまずさによるインフレの進行で、当時のトルコの定収入労働者は困窮生活を強いられた。軍将校も例外ではなかった。貧富の格差は拡大し、尊敬されるべき軍人も貧しいがゆえに、世の中で見下される現象も起きるようになっていた。

このころは、米国の援助で軍の近代化が進んだ一方、共和国建国以来の軍人の誇りが傷付けられ、軍人たちが、鬱積した不満を政治批判へと醸成していった時代でもあった。

1938年11月のアタチュルクの死後、軍は内部からばかりでなく、外的要因によっても、その立場を変化させられていった。アタチュルクを継いで、第二代大統領に就任したイノニユは、独立戦争の英雄であり、軍は依然として共和人民党とその政府との一体感を維持していた。

イノニユは独立戦争で、侵攻してきたギリシャ軍を破った英雄であり、アタチュルクの盟友と言える存在だが、第二次世界大戦中の強権的政策のせいで、トルコ人には今でも、あまり好かれてはいない。だが、イノニユは大戦末期に変化した。おそらく、直接的にイノニユに影響を与えたのは、英国首相チャーチルである。影響という穏やかなものではなく、恫喝という表現が正しいかもしれない。

チャーチルはイノニユに会い、大戦で中立を表明したトルコを連合国側につけるため、多大な外交エネルギーを費やした。その努力によって、イノニユは次第に連合国側へ傾斜し、国家支配体制もファシズム的全体主義から西欧型民主主義の導入へと向かい始めた。中立から連合国加盟への変換とは、軍事面だけでは許されなかったのだ。

1944年1月12日、軍参謀総長フェブジ・チャクマクが辞任した。1921年以来その座にあったチャクマクの辞任は、イノニユの民主化志向によって、国家における軍の立場が変化をしたことを示した最初の兆候だった。このとき、チャクマクは、政府が軍に対して文民支配を確立しようとしている、と辞任理由を表明した。イノニユが、一党独裁を脱し複数政党制へ移行する動きを開始したのは明らかだった。戦後を睨み、勝者の側に参入するには、民主主義の導入が不可欠だったからだ。

戦後の1945年11月1日、イノニユは「政治制度を抜本的に変革し、新たな世界情勢に対応させる用意がある」と演説し、さらに「トルコの主たる制度的欠陥は、反対政党の欠如である」と強調し、複数政党制の導入を公式に表明した。アタチュルク時代の実験はあったが、共和国初の本格的複数政党制は、こうして開始された。複数政党制の導入とは、共和人民党と不可分の関係にあった軍にとっても、国家における自らの絶対的な立場が相対化されることであり、共和国発足以来の軍の画期的転換点となった。

（ 8 ）複数政党制の時代

イノニユが複数政党制を宣言する以前に、共和人民党の党内には、新たな潮流が生まれていた。共和国は樹立以来、国家主導の統制色の強い経済政策を進めていた。だが、新国家の中にも、次第に民間資本が育っていた。新たな資本家層は、経済政策の自由化を志向し、彼らを代表する勢力が党内に生まれていた。党指導部とも対立するようになり、複数政党制の宣言から一か月後の1945年12月1日、中心人物四人が脱党し、翌46年1月7日には、新政党「民主党」を結成した。

しかし、民主党の基本思想もアタチュルク思想が根幹であり、共和人民党と大きな差異はなかったが、一党支配時代の権威主義的政策の批判、国民による下からの政治的主導権確立を強調するなど、抑圧的体制からの脱却を渴望する大衆への迎合に成功し、民主党の人気はいつき

に高まる気配をみせた。この動向に危機感を覚えたイノニユは、民主党の組織作りがまだ整っていない1946年7月21日、総選挙に踏み切った。この結果は予想通り、共和人民党が、国会定数465議席のうち、395議席を獲得して大勝した。民主党は64議席に留まった。

イノニユはこれに続いて、民主党人気を先取りして、一連の自由化政策を実行した。経済面では、平価リラの引き下げ、税制改革、金取引の自由化、輸入規制緩和などを実行した。また1947年には、労働組合結成を認めた。報道機関、社会団体への規制も緩和され、大学自治も確立した。注目すべきは、1950年に長く禁止されていた宗教教育も復活したことだ。このころ民主党から分離して発足した「国民党」が保守的、宗教的立場をとり、支持を高めようとしていた。アタチュルク革命の逆行とも言える宗教教育復活も、人気取り政策の一環であった。

だが、この自由化の期間は、経済的には、高インフレをもたらし、貧富の格差、富の偏在を生み、政治的には、自由をより多く求める欲求を拡大させた。こうした状況のもとで、複数政党制による第二回目の総選挙が、1950年5月14日実施された。その結果は、民主党も驚くで野党大逆転となり、国会定数487議席のうち、民主党が420議席を占めた。共和人民党は、わずか63議席に凋落し、国民党が1議席を取った。

1950年5月29日、新国会は、大統領にジェラル・バヤル、首相にアドナン・メンデレスを選出した。また外務大臣には、ファト・キョプリユルが就任した。いずれも共和人民党を離党し、民主党を設立した中心人物である。実際の権力は、メンデレスに集中した。始まったばかりの冷戦で、西側陣営の最前線国トルコに、民主化の旗手として登場した政権を米国も歓迎した。だが、この政権を特徴付けたものは、常に、共和国を牽引してきた共和人民党と軍への恐怖心であった。国会で絶対多数を掌握しながら、民主党は、その自縄自縛から逃れられず、民主化とは逆に、反対勢力への抑圧を次第に強め、強権支配の性格を濃くしていった。そして、最後は、1960年5月27日、軍の若手将校が主導権を握ったクーデターで倒された。

現在のトルコ国家支配体制において、軍は最高指導部を頂点とする確固たる政治的意思の統一を達成している。60年クーデターは、共和国初期の軍が、国際的、国内的政治情勢の変化の多大な影響を受けて変質している中で、内部的な統一がないままに政治に直接介入した点で、今日の軍支配体制に至る過渡期を象徴する大きな事件であった。

50年総選挙での予想外の大勝で政権を獲得した民主党は、支持基盤の拡大と共和人民党の孤立化を目論んで、共和国発足以来の国是である世俗主義によって抑制されていた国民の宗教的欲求を満足させる策に出た。この人気取り政策は、イノニユがイスラム宗教教育の再開で実行済みだったが、民主党は、さらに、1951年、アタチュルク時代に禁止されたイスラム聖職者養成学校イマム・ハティブを再開し、宗教教育予算も増額した。こうした一連のイスラム復活策は、宗教に敵対的だった共和人民党との違いを強調することによって、依然としてイスラム伝統が支配するトルコ社会に、民主党政権の存在意義を訴えるものだった。

この人気取り政策の結果，モスクは再び賑わい，イスラム聖職者たちは大衆への影響力を回復していった。非合法化されていたタリカット（イスラム教団）も活発な活動を再開した。民主党の意図は決して世俗主義路線の放棄ではなかったが，現在の世俗主義信奉者が，イスラム政党の強さに不安を覚えるように，当時も，アタチュルク思想から逸脱しかねないイスラムの復活気運は警戒され，反民主党勢力を結集させた。イノニユ時代に自治が確立された大学が，その中心になり，多くは共和人民党を支持した。

（ 9 ） 60年クーデター・・・軍秩序の開始

1953年7月12日，国会は大学法を改定し，大学の財政，教育，人事権限を制限し政府の介入を強化した。同年12月14日には，共和人民党が公共資産を不正使用したとして，党資産を没収し，同党に直接の圧力を加えた。伝統的な党機関紙ウルスモ，このとき発行禁止となった。こうした一連の政治的圧迫は，翌54年5月の総選挙を睨んだ措置だったが，民主党は選挙で再び大勝したあとも，圧迫を継続した。同年7月には，大学教官の政治活動を禁止，55年には，共和人民党書記長カスム・ギュレクが政府を誹謗したとして逮捕され，翌56年1月には出版法を改定して報道への統制を強化した。

こうした状況のもと，57年10月の総選挙で，民主党は，国会総議席610のうち424を占める圧倒的多数を維持したが，得票率は前回54年の56.6%から47.3%に落ち，共和人民党は議席こそ178だったが，得票率は34.8%から40.6%に躍進した。

この結果，両党の対立はさらに先鋭化し，59年には，イノニユが民主党支持の群集に攻撃される事件まで起きた。60年に入ると，反政府勢力の批判はさらに高まり，2月には，政府高官の汚職を激しく追及した。街頭での抗議行動も広がり，軍，警察が出動する騒然とした雰囲気覆われた。1960年5月27日の軍事クーデターへと至る状況は，このころ発火点に達し，4月18日，民主党は自らの手で，そこに火を放り込んだ。

同日，民主党は，共和人民党と報道機関の活動を調査する法案を国会に提出した。両党の激しい論争の末，共和人民党が退場したあと，民主党は賛成多数で，共和人民党の政治活動禁止と同党に関する調査委員会の設立を決定した。この結果は直ちに，各地での激しい反政府デモとなり，学生と警察が衝突し，多くの死者が出た。4月29日には全大学が閉鎖され，多数が秘密裏に拘束された。

そして5月21日には，首都アンカラで，陸軍士官学校の学生が街に出てデモ行進を行った。これは，政府に対する反発を，軍が初めて堂々と示した行動となった。

5月27日早朝，陸軍司令官を退官したばかりのジェマル・ギュルセル大將を指導者とするグループは，アンカラとイスタンブールの部隊，士官学校学生を指揮して，首相メンデレス，大

統領バヤルのほか、閣僚、民主党国会議員らを拘束し、午前七時のアンカラ放送で、軍による政権掌握を宣言した。このグループは、「国家統一委員会」と名乗り、38人のメンバーで構成されていた。直ちに、軍全体の支持を獲得し、その後の1年5か月にわたる軍事政権の主体となった。

国家統一委員会が政権を掌握したというラジオ放送で、知識人や学生は歓喜した。彼らは、軍事クーデターというより、むしろ、革命成就の解放感を味わったのだ。この雰囲気は、1960年クーデターの性格を特徴付けている。

1950年代は、トルコ史の大きな転換点となった。新たな政治エリートの誕生、世俗主義下で潜んでいたイスラムの再生など、現在の政治舞台の主要な役者たちは、この時代に出揃った。軍も、自らの力で作り上げた国家と一体化したアイデンティティをそのまま維持することはできなくなった。政治、社会構造の変化によって、軍の威信は、従来のように絶対的なものではなくなったからだ。60年クーデターは、学生や知識人、そして共和人民党にとっては、民主党抑圧政権からの脱出だったが、軍の側から見れば、反民主党勢力と連動しつつ、軍の社会的地位、国家における優位性を回復し、そのアイデンティティを再び確立する出発点となった。

だが、この出発点を準備したのは、軍の最高指導部ではなく、大佐以下の若手将校たちだった。将軍たちを最高指導者に招き、階級組織の秩序を名目上は守ったとはいえ、主体となったのは将校グループであり、その意味では、下克上であり、まさに「革命」的であった。その後の展開は、クーデターに引きずり込まれた首脳の将軍たちが、その果実を没収したあと、軍内部の不満分子を粛正しながら、トルコ国家・社会における軍の揺るぎない立場を整備していくことになる。それが完成に到達するには、1960年に続く、71年、80年の二つのクーデターを経る。

50年代は様々な思想傾向が生まれたが、軍内部も、こうした世の中の動きから大きな影響を受けた。軍人たちも、様々な異なる政治的意見を持つことが可能になった。軍人の多くは、かつて一心同体だった共和人民党のもとに結集したが、同党に距離を置き民主主義の確立を重視するグループもあり、左翼や右翼、イスラム思想も浸透していた。

こうした状況を反映して、クーデター画策の中心になった14人の将校も、様々な立場にあった。彼らには、政権掌握後の統一した計画すらなかった。

クーデター後の軍首脳部にとっては、政治的秩序の回復とともに、自らの軍組織秩序の回復が急務となった。この二つの目標達成の過程自体が、現在のトルコ軍の地位確立の道筋となった。その地位を保つには、アタチュルク思想は神聖不可侵の国家原理であり、それを守護できるのは軍だけだという共同幻想の維持が不可欠である。それが、現在のトルコの統治システムの基礎になっている。

軍は、政府を越えた国家の最高権力者となった。毎月開催される国家安全評議会では、大統

領，首相をはじめとする主要閣僚が参謀総長らの軍首脳に政府の政策を説明し，軍は政府に指示を与える。トルコの民主化は，根本的には，この制度の廃止である。それは，新たな革命に匹敵する体制変革になろう。

Ataturk and the Military in the Making of Modern Turkey

Since 1980's Turkey has been trying to become a member of the European Union (EU). However, it seems impossible for the Turks to realize their goal, since what they call 'democracy' is not the democracy of the Europeans. For example, EU is concerned with the non-freedom of speech and association, the violation of the human rights of the Kurdish minorities, excessive secularisation of the Islamic party. One of the crucial points to be noted here is its modernisation process, which has made it impossible to democratise Turkey as the members of the EU demand today. It is suggested that what Turkey can do for the membership of the EU will be the critical appraisal of the historical rule of Ataturk, leader of the modernisation of this country, and his successors. It will be argued that the Turkey's entry to the EU will never be realized, unless Turks start questioning their policy in the public. In this paper, I will expand my argument in this regard, based on my own experience, which I gained when I was a journalist at Yomiuri Shinbun in Istanbul for two and half a year from 1997.

（SUZUKI, Masaaki 読売新聞東京本社 解説部次長）

